

### 契沖に関する重要資料『契沖事蹟考』の発見と喪失

佐佐木信綱は、上田萬年と契沖研究を通じて強い連携関係を築いていた。

上田萬年については、近年の研究者は、その国語政策への影響に焦点を当てている。近年の学者によれば、上田は古学を中心とした国学ではなく西欧の博言学（言語学）にもとづく国語研究を推進しようとしたというのが大方の見方らしい。

しかし、すでに「国学」は佐佐木とともに近代文献学にもとづいた「国語国文学」と整合するように再構築されつつあったのだし、また、上田萬年が佐佐木信綱と連携しつつ契沖研究ならびに国学研究に与えた影響には端倪すべからざるものがある。

端的に言えば、江戸の「国学」は上田萬年と佐佐木信綱によって国民国家の Legacy として再構築されたときえ言いうるのである。

ことは明治の末年から起動していたのだった。

なかでも、印象的なのは、佐佐木著『和歌史の研究』所収の「七十三 続探蹟記」と題したエッセイ風の記録に書かれた内容である。

明治 43 年 7 月 31 日、佐佐木信綱は、大阪府知事・高崎親章の斡旋で、上田萬年博士とともに大阪市内平野町の「殿村家」を訪れていた。同家の所蔵する契沖文献を見るためである。昭和二年刊の『増訂和歌史の研究』(p.408)には、今は見ることのできない中川昌房撰『契沖事蹟考』一卷を見たとの記述があって注目される。この資料の一部は、やはり昭和 2 年に朝日新聞社から刊行された『契沖全集 第九卷 伝記及伝記資料』(久松潜一著)に翻刻されているが、現在はその原本を確認することができない本である。

上の『増訂 和歌史の研究』には、「追記」として、「殿村家所蔵の契沖及び長流（＝契沖の歌友、下河辺長流）の著書は、すべて契沖全集に収めたことである。」と記している。契沖の伝記資料を朝日新聞社版の『契沖全集』に収録する実務を担ったのは、後年東京帝国大学教授となる久松潜一である。

『契沖事蹟考』は、契沖の伝記に関する文献を集めたもので、その中には契沖伝記資料中の基礎資料である安藤為章の「円珠庵契沖阿闍梨行実」や契沖の友人の一人である僧義剛による「録契沖師遺事」が収められていた。特に、義剛「録契沖師遺事」は、契沖の伝記をたどるうえで極めて重要な一次資料として江戸期から注目されてきたにもかかわらず、現在はその原本の所在を確認することができないままにある資料であり、久松潜一「契沖伝記資料」(朝日新聞社『契沖全集 第九卷 伝記及伝記資料』所収)もその出所を記していないのである。久松は『契沖事蹟考』から「録契沖師遺事」を孫引きした可能性がある。

ともかくも、現在は、契沖の高野山時代からの友人である義剛が記した「録契沖師遺事」の所在も、それを引用した『契沖事蹟考』の所在も、ともに不明である。少なくとも私の調査では所在を突き止めるに至らなかったのである。

こうした事情であるから、明治 43 年の夏に佐佐木が上田とともに自ら『事蹟考』を見たとする記述

のもつ意味は大きい。

あるいは、岩波書店刊の『契沖全集 第13巻』(p.639)に、殿村家が所蔵していた契沖自撰の『漫吟集』が「戦災で焼かれ」たとの記述を見るので、『契沖事蹟考』も同様に焼失したのかもしれない。

また、上に引いた『増訂 和歌史の研究』には、「大阪府立図書館に安政六年山川正宜の校正した本があるがそれは誤写が多い。」とあるが、その方もまだ確認が取れないでいる。

上に見たように、佐佐木が発掘した幾多の契沖文献がその娘婿の久松潜一の契沖研究の土台となったのである。これも上で触れたように、久松は佐佐木の編集した朝日新聞社版『契沖全集』で「伝記及伝記資料」を取めた第9巻を担当した。その久松は、戦後、岩波書店から刊行された『契沖全集』の校訂者代表を務めている。また、筑摩書房から刊行された『本居宣長全集』で大きな役割を果たした大久保正は、学生時代、佐佐木信綱に教えを請い、久松を指導教官としている。

こうして見ると、上田萬年と佐佐木信綱のタグによって緒についた国文学の文献学としての定礎は、久松潜一に継承され、また、戦後宣長学の最大の成果とも言える筑摩版『本居宣長全集』は大久保正、大野晋らによって完成されていくわけで、近代国文学の形成の原点において上田と佐佐木の協働が果たした役割の大きさ、また、彼らのビジョン達成における実行力の確かさが改めて見直されるのである。

2020年3月30日 研究代表者 西澤 一光